

## 第4節 高校1年生

### 生命と環境Ⅱ ～「なぜ」を掘り下げる～

曾 我 雄 司・高 橋 芽衣子  
長 瀬 加代子・湯 浅 郁 也  
金 子 純・西 川 陽 子

**【抄録】** 高校1年生の総合人間科は、「生命と環境」を大テーマとする個人研究である。中学3年間の蓄積がある附中進学者とはじめての取り組みとなる高校進学者との融合を図りつつ、両者にとってバランスの取れたプログラム作りを目指した。また研究の方法論を一から確認することによって、確実な立論をしていく姿勢を育成しつつ、仮説検証的学習を念頭におくことでいわゆる「調べ学習」からの前進を目指した。

**【キーワード】** 生命 環境 個人研究 仮説検証的学習 ESD (持続発展教育)

#### 1. 目標

高校1年生の総合人間科は、大テーマ「生命」「環境」に関わる研究テーマを設定しての個人研究である。高校1年生は、附属中学からの進学者（以下「附中進学者」とする）と高校からの入学者で構成される。中学3年間の総合人間科の積み上げのある附中進学者に対して、高校入学者にとっては最初の総合人間科となり、このバランスをどうとっていくかが、高1総人の難しいところである。

今年度は、総合人間科の方法論を確認させるとともに、仮説検証的学習を念頭におくことで、調べた・わかった・楽しかったで終わってしまう「調べ学習」から脱却し、より「研究」に近づけることを目指して、プログラムを組んだ。サブテーマ「なぜ」を掘り下げるは、調べたことで満足するのではなく、つねに疑問を持ち、興味関心を掘り下げつつ研究を進めていくことをねらったものである。

一年間の学習を通して伸ばしたい力は、以下のとおりである。

- ・興味関心を持ったものごとについての仮説検証的な学習を通じて、研究・表現のための基礎的な技術を習得する。
- ・自然事象や社会環境について、興味関心を広げていく。
- ・持続可能な社会を作るために、自分に何ができるか、自分たちには何ができるかを念頭におきながら、研究をしていく（ESDとの関連性）。
- ・他者との関わりを大事にする姿勢を身につける（コミュニケーション力）

#### 2. 学習方法

- ・林間学校の機会等を通じて、「生命と環境」につい

での興味関心を深める。

- ・個人テーマを各自選択し、研究・FWによって「生命と環境」のテーマの下に自分の興味関心を掘り下げていく。
- ・仮説的な個人テーマを設定しそれを検証する形で、理解を深め研究の質を向上させる。
- ・個人テーマとつながりのあるメンバーとのグループを構成して研究を進めることなどにより生徒間の交流を深め、新たな学年としての融合性を高める。
- ・集録執筆などを通じて、先行研究やFWの結果を踏まえつつ、それに引きずられずに自己の意見をまとめる。
- ・ポスターセッションなどの形で自己の研究を発表することで、プレゼンテーション能力を高める。また他のクラスメートの研究発表を聞くことで、「生命と環境」についての理解を深める。

#### 3. 活動内容

##### (1)年間計画

	日付	内容
1	4月16日	春休み課題発表会
2	4月17日	発表のフィードバック
3	5月1日	ガイダンス・派生図を書く
4	6月5日	REAL KJで研究グループ作り
5	6月12日	仮テーマの検討・プレ研究
6	6月26日	林間学校準備
7	6月30日 ～7月2日	林間学校（蓼科） プレ研究発表
8	7月10日	プレ研究発表フィードバック
	夏休み	宿題（仮説提示、下調べ、FW先候補）
9	9月11日	夏休み課題発表
10	10月16日	アポ取り開始
11	10月30日	依頼状送付

12	11月6日	フィールドワーク直前準備
13	11月13日	フィールドワーク
14	11月20日	お礼状執筆・送付・フィールドワークのまとめ
15	11月27日	フィールドワーク報告会・集録執筆について
	冬休み	宿題（集録下書き執筆）
16	1月8日	集録清書
17	1月22日	発表準備
18	2月5日	グループ内発表
19	2月12日	ポスターセッション（全体発表会）
20	3月12日	まとめ／高2の総人について

(2)個人テーマとフィールドワーク先

研究テーマ	訪問先
淡水魚絶滅が人間に及ぼす影響	世界淡水魚園水族館 アクア・トトぎふ
地球の飢えは防げるか	名古屋大学農学国際教育協力研究センター
生きるとは	南山大学人文学部キリスト教学科
地球温暖化	名古屋大学大学院環境学研究科 地球環境科学専攻
うなぎの養殖	なごや環境大学
生物多様性とは	名古屋市立大学システム自然科学研究科
生命の起源を探る	名古屋大学大学院環境学研究科
核融合発電は実現可能か？	自然科学研究機構 核融合科学研究所
リニアと環境破壊について	リニア鉄道館
犯罪の原因は家庭環境にあるのか	東尾張病院
リニア鉄道による日本経済への効果と沿線環境について	リニア鉄道博物館
iPS細胞の最前線	京都大学iPS細胞研究所
心に響く言葉	名古屋大学文学部
香りから得る癒しとは	日本アロマテラピースクール
地球温暖化による海面上昇について	名古屋大学太陽地球環境研究所
電気エネルギーの有効活用	豊田エコフルタウン
環境保護と経済成長の両立	名古屋大学大学院経済学研究科
PM2.5の実情と対策	愛知県庁環境部大気環境課規制グループ

文字が文明に与えた影響	名古屋大学大学院文学研究科
食べ残しとエコフィード利用	名古屋大学大学院生命農学研究科食糧管理学
宇宙移住はできるのか？	名古屋大学大学院理学研究科天体物理学研究室
捕鯨の真実	中部大学大学院国際人間学研究科
メイクとアレルギー	株式会社アルソア化粧品 愛知販社アンフィニ
世界の医療現場	名古屋大学大学院医学系研究科国際保健医療学・公衆衛生学教室
海洋生態系～バラスト水問題～	名城大学農学部環境動物学研究室
異常気象と生命	名古屋大学地球水循環研究センター
国民総幸福～本当の幸せ～	フェアトレードショップ 風's
発達心理学～心って成長するの？～	中京大学心理学部発達心理学領域
モノの開発	名古屋大学大学院工学研究科計算数理工学専攻
子どもの成長と言語の発達	愛知淑徳大学健康医療科学部医療貢献学科言語聴覚学専攻
カーボナノチューブにおける工学的利用	名古屋大学エコトピア科学研究所（工学研究科電子情報システム専攻）
海ゴミの生物への影響	名古屋大学地球水循環研究センター 衛生生物海洋学研究室
世界の貧困	名古屋大学大学院国際開発研究科
動物の行動に意味はあるのか	東山動物園
動物の菌	東山動物園
frog	愛知教育大学
人は何故生きるのか	南山大学人文学部キリスト教学科
アレルギーを苦痛なく治すには	若月こどもとアレルギーのクリニック
家庭環境と子どもの成長	中京大学心理学部発達心理学領域
人が生き残るためには	名古屋大学地球水循環研究センター
現状と未来～核融合から見る未来の技術～	自然科学研究機構 核融合科学研究所
メンタルトレーニングで強くなる	名古屋大学総合保健体育科学センター
遺伝と突然変異	名古屋大学大学院生命農学研究科

南海トラフ巨大地震～どのような対策をとるべき?～	名古屋大学減災館
緩和ケア	愛知県がんセンター中央病院 緩和ケアセンター
食	名古屋栄養専門学校
植物における生物多様性について	名古屋大学農学部
火山噴火と地震による噴火予知について	名古屋大学大学院環境学研究科附属地震火山研究センター
バイオテクノロジーで世界を救えるか	名古屋大学生物機能開発量研究センター
海の環境とイルカ	名古屋大学大学院環境学研究科
人とおいの関わり	大同大学情報学部かおりデザイン専攻
人は火星に住めるのか	名古屋大学大学院理学研究科
夢から見る「快眠」とは	中部大学生命健康科学部生命医科学科
淡水で生きる者たち	岐阜県世界淡水魚園水族館アクア・トトぎふ
整形の光と闇	湘南美容外科クリニック
ヨーグルトのちから	森永乳業株式会社
動物に心はあるのか?	名古屋市動物愛護センター
地球温暖化	名古屋大学大学院環境学研究科
ストレス社会と人間	覚王山メンタルクリニック
フェアトレードの可能性	JICA中部、フェアビーンズなごや地球ひろば店
運動を通じた健康へのアプローチ	名古屋大学総合保健体育科学センター
宇宙のはじまり	名古屋大学大学院理学研究科天体物理学研究室
動物に心はあるだろうか	名古屋大学大学院情報科学研究科
絶滅危惧種	名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科
地球温暖化	名古屋大学大学院環境学研究科 地球環境科学専攻
終末期医療と死生学	名古屋大学大学院医学系研究科 地域在宅医療学老年医学教室
人が考えること	南山大学人文学部キリスト教学科
テラフォーミングについて	半田空の科学館

環境問題が問題になる過程	名古屋大学大学院環境学研究科
森田療法	NPO法人「生活の発見会」
アレルギー	名古屋市立大学薬学研究科
運動と食事の関わり	名古屋大学総合保健体育科学センター
放射線の性質と活用	名古屋大学アイソトープ総合センター
男性看護師が最近増えてきているワケ。	名古屋市立西部医療センター
リクガメとウミガメを絶滅させないためには?	世界淡水魚水族館 アクア・トトぎふ
大量絶滅	生命の海科学館
絶滅危惧種	東山動物園
がんと疫学	愛知県がんセンター疫学・予防部
クローンについて	名古屋大学生物機能開発利用研究センター
子どもの心理学	中京大学心理学部発達心理学領域
多くの人に注目してもらう商品はどのようなものか	名古屋大学大学院工学研究科計算数理工学専攻
感情とは何か	名古屋大学大学院理学研究科生命理学専攻
チンパンジーの習性とその理由	京都大学霊長類研究所
生物はなぜ進化するのか?	岐阜大学応用生物科学部生産環境学課応用動物科学コース
社会形態の推移と人の感情	金城学院大学
湿地の持続的な利用法	藤前活動センター
脳死は人の死か	名古屋経済大学法学部
嘘をつくときの表情の変化と脳のはたらき	名古屋大学大学院環境学研究科心理学講座
性格と栄養	名古屋大学農学部生命農学研究科
人類が宇宙進出するためには	株式会社タマディック 大江技術部
日本人にとって宗教とは?	愛知学院大学文学部宗教文化学科
海洋生物の生態とバイオリギング	名古屋大学 情報文化学部 自然情報科環境システム系
乳幼児の能力と心の発達	中京大学心理学部心理学科
国際司法裁判所～捕鯨についての判決を例に～	名古屋大学大学院国際開発研究科

人が犯罪を犯してしまう時の心理とは？	東尾張病院
飛行機と環境のつながり	名古屋大学工学部機械・航空工学科航空宇宙工学専攻構造力学グループ
心と脳のつながり	名古屋大学大学院理学研究科脳機能構築学研究室
骨の成長（進化）について	名古屋大学大学院医学研究科運動形態外科学.整形外科／小児
クローン技術のこれからと安全性	名古屋大学生物機能開発利用研究センター
アレルギー事故の対策について	名古屋市教育委員会学校保健課
ファッションの多様化と未来	名古屋ファッション専門学校
スポーツ学～スポーツ選手が100%の力を発揮するために～	ファイテン株式会社
子どもの性格と環境	愛知教育大学
同性愛の誕生の理由	名古屋大学附属病院泌尿器科
地震と地名の関係	名古屋大学減災館
地球温暖化と異常気象	名古屋大学水循環研究センター
電磁波が与える動物への影響	名古屋工業大学
遺伝子の善悪	名古屋大学大学院生命農学研究科
音楽はなぜ存在するのか	甲陽学院等非常勤講師
アサギマダラの長距離飛行	三重県総合博物館
生物の絶滅の原因について	名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科
クローンの可能性	名古屋大学生物機能開発利用センター
バイオミメティクスにある可能性は何か	産業技術研究所中部センター
1℃の気温上昇が持つエネルギー	愛知県庁環境部大気環境課地球温暖化対策室
どうして食料自給率を上げるためには地産池消が大切なのか	尾張旭市役所 市民生活部産業課
人が音楽から影響を受ける理由	名古屋文理大学情報メディア学科
生物多様性	名古屋市立大学大学院システム自然科学研究科
遺伝が人間形成に与える影響	藤田保健衛生大学総合医科学研究科 分子遺伝学研究部門
薬の研究開発と可能性	名古屋市立大学大学院研究科創薬生命科学専攻

発達する遺伝子技術の現状	名古屋大学大学院医学研究科 産婦人科学
--------------	---------------------

#### 4. 評価

- ・ 教員による評価（ワークシートへの記入・提出、FW等への取り組み、集録）
  - ワークシート・集録の完成度、課題の提出状況、取り組みの状況など
- ・ 生徒自身による自己評価（アンケート、発表や一年間の振り返り）
  - アンケートの分析など
- ・ 生徒間の相互評価（林間学校への取り組み、発表）
  - 話し合いへの参加状況、発表の完成度など

#### 5. 生徒アンケートの結果

最後の授業の時間にアンケートを行った。その結果と分析とを以下に示す。なお昨年度も筆者は高校1年生の総合人間科のプログラムを担当したため、前年度アンケート結果との対比も可能な限りでしてみたい。（回答の総数は120。ただ項目によっては未回答の生徒もいたため、合計は必ずしも120にはならない）

#### Q. 1 総合人間科の授業で、一番印象に残っているプログラムは何ですか（選択と理由記述）。

a 春休み課題および発表会	0
b 派生図	1
c マインドマップ	4
d プレ研究および発表会	2
e 夏休み課題	1
f REAL KJ	1
g フィールドワーク	52
h 集録作成	10
i グループ別発表	10
j ポスターセッション	37

ほぼ半数が、「フィールドワーク」を一番印象に残っているプログラムとしてあげている。その理由としては、「興味のある分野について専門家や現場の話を直接聞くことができた」「最も情報を得られた」という記述が多く、研究におけるフィールドワークの比重の大きさを感じた。「初めてアポ取りの電話などをしたことが印象に残っている」との記述もあった。次に多い「ポスターセッション」については、「わかりやすく相手に伝えるために苦労した」といった記述が多くみられた。

昨年度も同様のプログラムを行い、同じ項目でアンケートを行ったが、ほぼ同様の数値であった。フィールドワークおよび全体発表が、高1の総人の中で大きな比

重を占めていることがよくわかる。夏休み前のプログラムへの関心が薄いことについて、昨年度は校舎改修の影響も考えたが、それは関係なさそうだとすることもなかった。

**Q. 2-1 自分なりの仮説を立てることができましたか。**

- |              |    |
|--------------|----|
| a かなりできた     | 23 |
| b ややできた      | 64 |
| c どちらともいえない  | 17 |
| d あまりできなかった  | 10 |
| e まったくできなかった | 2  |

**Q. 2-2 自分の検証は十分にできたと思いますか。**

- |              |    |
|--------------|----|
| a かなりできた     | 35 |
| b ややできた      | 55 |
| c どちらともいえない  | 13 |
| d あまりできなかった  | 12 |
| e まったくできなかった | 1  |

今年度、仮説検証的学習方法によって研究を進めさせたが、生徒たちがそれをどの程度意識し、達成できたと実感しているかを図るために質問項目として設けた。仮説の設定・検証ともに「b ややできた」の回答が過半数を占めた。Q. 2-1、Q. 2-2回答の相関を見ても、Q. 2-1、Q. 2-2でともに「b」を選んだ生徒の数が最も多く、それに次ぐのがQ. 2-1で「a」、Q. 2-2で「b」を選んだ生徒（仮説はうまくたてられた／検証は完ぺきとは言えないができた）であった。生徒たちの意識の中では、仮説検証的学習が成功していることがアンケート結果からはうかがえる。

しかしQ. 2-1に設けた記述「あなたの仮説はなんでしたか」を見ると、「国家間の争いを平等に解決する」などのように目標でとどまり仮説となっていないものや、「心神喪失者の触法行為は犯罪である」のように法律という覆せない既定の事実を仮説としているなど、仮説設定の段階で成功していないケースも少なくなかった。

**Q. 2-3 仮説検証型で研究を進めていく中で、困ったこと、わからなかったことは何かありますか（記述のみ）。**

多かった回答としては、「最初に何を仮説として立てたらよいか、よくわからなかった」「そもそも仮説をどう立てるのがよくわからなかった」というものがある。また「調べるとすぐ出てしまうことばかりで仮説を立てるまでが大変だった」という回答も複数あり、授業内で仮説の立て方についての指導が十分でなかった

ことを痛感させられた。

他に「調べたいことの文献があまり見つからなかった」など、テーマの選択によっては仮説の設定・検証が困難なものもあったようである。生徒が立てた仮説の吟味や、仮説検証できないテーマに対する対応が必要だったことも改めて気づかされた。

**Q. 3 今年の総合人間科では、「生命と環境の今日的な課題を見つけて、持続可能な開発を目指す（ESD）」ことを目指しましたが、どのくらい意識して研究を進めることができましたか（選択と理由記述）。**

- |               |    |
|---------------|----|
| a かなり意識した     | 9  |
| b やや意識した      | 21 |
| c どちらともいえない   | 20 |
| d あまり意識していない  | 38 |
| e まったく意識していない | 24 |

年度最初の授業で目標として掲げたESDについての意識を問うた。昨年度は「意識した」（a, b）とする生徒が、「意識していない」（d, e）とする生徒よりも若干多かったが、今年度は「意識していない」と回答する生徒が多かった。仮説検証の指導に重点をおいた関係で、あまり授業内で取り上げなかったことが大きかったと思われる。

記述欄を見ると、昨年と同様テーマに左右されることが大きいことがわかった。興味深いのは「意識はしていなかったが、ESDという言葉を聞くと自分の研究はこの部分が当てはまるのではないか」という回答があったことである。「ESDとは関係を見出せないが今日的な問題を追及した」という回答もあった。

**Q. 4 今年の総合人間科では、文献の引用の仕方などにも注意することを目指しましたが、どのくらい意識して研究を進めることができましたか（選択と理由記述）。**

- |               |    |
|---------------|----|
| a かなり意識した     | 30 |
| b やや意識した      | 56 |
| c どちらともいえない   | 19 |
| d あまり意識していない  | 10 |
| e まったく意識していない | 3  |

引用の作法という点については、集録執筆の際に力を入れて指導したこともあり、「意識した」（a, b）とする生徒は80%近くいた。昨年度の回答では、55%であったことを考えると、かなり成功したのではないと思われる。記述の中にも「引用した部分はかっこをつけた

り、アクセスした日などの記載も注意しながら進めた」というものが散見された。いわゆる「コピペ」問題は、同時期にSTAP細胞問題があったこともあり、生徒たちにも意識されていたのであろう。

他、「公式のサイトから情報を得たり、大学のサイトからの情報を中心にした。だれでも書き込めるサイトのものは見なかった」という記述があった。あと2年間の総人の学習の中で、「引用する文献がそれでよいのか」という引用文献の「質」を問う、次の段階へと進んでいくことを期待したい。

**Q. 5** 今年の総合人間科は、グループでまとまって個人研究をすすめましたが、その過程でグループやクラスの仲間と協力したり、他者を理解することができましたか（選択と理由記述）。

- |   |            |    |
|---|------------|----|
| a | かなりできた     | 19 |
| b | ややできた      | 56 |
| c | どちらともいえない  | 29 |
| d | あまりできなかった  | 9  |
| e | まったくできなかった | 3  |

高校1年生では、個別研究を行う生徒を、教員6人でそれぞれ約20人前後を担当しているが、ここ数年の取り組みとして、機械的にグループ分けをせずに、REAL・KJというプログラムを用いて、個人テーマに近いもの同士を集めたグループ作りをしている（これは融合プログラムの一つでもある）。

昨年と比べると、「a かなりできた」が10程度少なく、その分「c どちらともいえない」が増えたのが大きな変化である。これは今年度の進め方として、話し合いや発表のフィードバックをする際に、グループ内で3～5人程度の少人数グループを作らせたことが大きな要因ではないかと思われる。もっと気楽に意見交換をできるようにとの配慮であったが、結果として20人のグループの意味は見いだせなかったのではないだろうか。ちなみに昨年と同様、肯定的な回答についての記述は、「近いテーマであることで教えあいができた」「同じ場所へフィールドワークに行った」などの回答、否定的な回答についての記述としては、「グループで集まる意味がよくわからなかった」「一人で調べることばかりだった」というものであった。

**Q. 6** フィールドワーク（アポ取り・当日・お礼状）は、うまく進めることができましたか（選択と理由記述）。

- |   |        |    |
|---|--------|----|
| a | かなりできた | 42 |
| b | ややできた  | 51 |

- |   |            |    |
|---|------------|----|
| c | どちらともいえない  | 17 |
| d | あまりできなかった  | 7  |
| e | まったくできなかった | 0  |

肯定的な評価が7～8割であった。これは昨年度と同様の傾向である。

**Q. 7** 研究集録には、これまでの研究を踏まえて自分の考えをまとめることができましたか（選択と理由記述）。

- |   |            |    |
|---|------------|----|
| a | かなりできた     | 30 |
| b | ややできた      | 70 |
| c | どちらともいえない  | 11 |
| d | あまりできなかった  | 5  |
| e | まったくできなかった | 0  |

8割以上の生徒が肯定的な評価をしている。昨年と比較すると「d あまりできなかった」が7程度減り、その分「b ややできた」が増えている。

「書きたかったことを、A4サイズ2ページに上手にまとめられた」というのがよくみられる記述である。「d あまりできなかった」とする回答については、昨年と同様、「調べたことに対して集録に書くことのできる分量が足りなかった」とする記述があった。

**Q. 8** ポスターセッションでは、これまでの研究を踏まえて自分の考えを発表することができましたか（選択と理由記述）。

- |   |            |    |
|---|------------|----|
| a | かなりできた     | 32 |
| b | ややできた      | 56 |
| c | どちらともいえない  | 16 |
| d | あまりできなかった  | 12 |
| e | まったくできなかった | 1  |

肯定的な評価が目立つ（昨年度と各解答項目の数値はほぼ同じである）。「相手にわかりやすく」「自分の研究を簡潔にまとめる」「時間が足りなかった」という言葉が記述には多く見られた。それがうまくいったか、いかなかったかで、a～eの選択が違ってきたようである。昨年度と違うところは、「いろいろな人の話を聞くことができた」という記述がほとんどなかったことである。これは今年度の学年のカラーかもしれない。

**Q. 9** 今年度の総合人間科の個人研究のプロセスのうち、あなたが特に力を入れたのは、次のうちどれですか（選択のみ）。

a テーマ決めおよびプレ研究	10
b フィールドワーク	40
c 集録作成	35
d グループ別発表	5
e ポスターセッション	22

Q. 1と重複する部分もあるが、何を中心として一年間の総人の学習を生徒たちが捉えていたかを確認するために、今年度あらたに設定した質問である。回答の結果は、総人の中軸がフィールドワークであることを感じさせるが、興味深いのはQ. 1では評価の高くなかった集録作成をあげている生徒が多かったことである。当たり前と言ってしまうとそこまでだが、一年間のまとめを見る形で残すことに生徒は強く意識を持っていたということである。しかし逆にいえば、一年間のまとめ以上に、いうなれば手段のひとつにすぎないフィールドワークの持つ意義・比重が大きいというのが、総人の現状であることを知ることができる。

Q. 10 あなたが自分自身の総合人間科の授業の評価をつけるとしたら、どうしますか（選択と理由記述）。

A とてもよくがんばった	52
B がんばった	62
C あまりがんばらなかった	3

三段階評価だったとはいえ、学年の5割がA評価、6割強がBであったというのは、総合人間科の学習が生徒にとって満足のいくものであったことを示している。記述には、「個人的に興味のあるテーマを追及できた」「一年間研究をつづけることができた」など肯定的なもの、「来年はもっと頑張りたい」など未来志向のものなどがあつた。

## 6. 今後の課題など

筆者が高1の総合人間科のプログラム担当をするのは2回目、高1の総人プログラム自体に関わるのはこの10年間で5回目となる。今年度の取り組みとともに、この10年間の取り組みとその変遷を踏まえながら、今後の課題を示して攔筆したい。

この10年での大きな変化は、インターネット環境の整備ではないかと思う。生徒たちは本ではなく、インターネット上から多くの知識を引き出してくるようになった。それまで調べることのできなかったテーマも、webを検索することで、追求できるようになった。

しかしその膨大な情報をどのように主体的に整理すること、そのために情報の吟味・判断をすること（情報の鵜呑みをしないこと）、批判的な思考ができるようにな

ることが、次の課題となった。引用の仕方とともに、情報リテラシーなどについて説明する時間を今年度はとった。アンケート結果および集録を見ると、それはある程度達成されたものと思われる。

総人におけるフィールドワーク中心主義もいろいろな問題を投げかけている。過去の研究の中には、フィールドワークで聞いたことをまとめて事足りりとしたものもあった。専門家に聞くとはいえ、そこをステップに自分の研究を行わなければ、これもまた「コピペ」で終わってしまう。集録執筆に際して、フィールドワークの事後学習を今年度は強調した。またフィールドワークを行う日程が中1・中2・高1の三学年重なっているため、その調整などで校内外の皆様に混乱と迷惑をもたらしているのも事実である。フィールドワークを必須としないという解決策もあるが、アポ取りや依頼状・お礼状執筆などを通じたソーシャル・スキル学習の側面が失われることは惜しいことである。

高1の総人固有の問題をあげるならば、附中出身者と高校入学者の融合の問題がある。この近年の取り組みとして、林間学校における融合プログラム、REAL・KJなどがある。昨年度・今年度もこれを踏襲したが、昨年度の校舎改修の影響を受けて、林間学校が7月に移動したため、融合プログラム実施ができなくなり、総人の中間発表会という形をとった。昨年度は総人の実施時間が少ないためやむを得なかったが、今年度は「林間学校でこれをやらなくてもよいのではないか」という声が生徒からもあがった。また林間学校のプログラムに、かつては大テーマ「自然と環境」と関連するものが入っていたが、この数年はそれもない。校外行事とのリンクは総人のひとつの柱であったが、それも検討の段階に来ているということである。この10年で高校入学者の雰囲気も変わってきており、すんなりと融合が進んでいる感もある。その意味では、総人の中で融合を担う必要はもうないのかもしれない。

ちなみに総人のキーワードのひとつである「脱教室」。それは校外行事（研究旅行・林間学校）、文化祭（高校分科会・中学演劇コンクール）、フィールドワークと関連付けられたものであったが、このうち前者二つについては中3・高2の研究旅行以外ではほとんど機能していない。フィールドワーク中心主義に現在の総人が落ち着くのは、必然的なものなのかもしれない。

また今年度は、スーパー・グローバル・ハイスクール（SGH）申請との関係もあり、仮説検証の学習法を取り入れた（2014年度は、結果としてアソシエイト指定で終わった）。しかしアンケート結果からも明らかなように、仮説検証という手法を意識させるにはあまりに時間が過ぎ過ぎた。そもそも仮説を立てる前段階の調べ方についてすら、不案内である生徒は少なくない。興味関心の深め方、疑問の見つけ方、文献の調査方法、諸説の整

